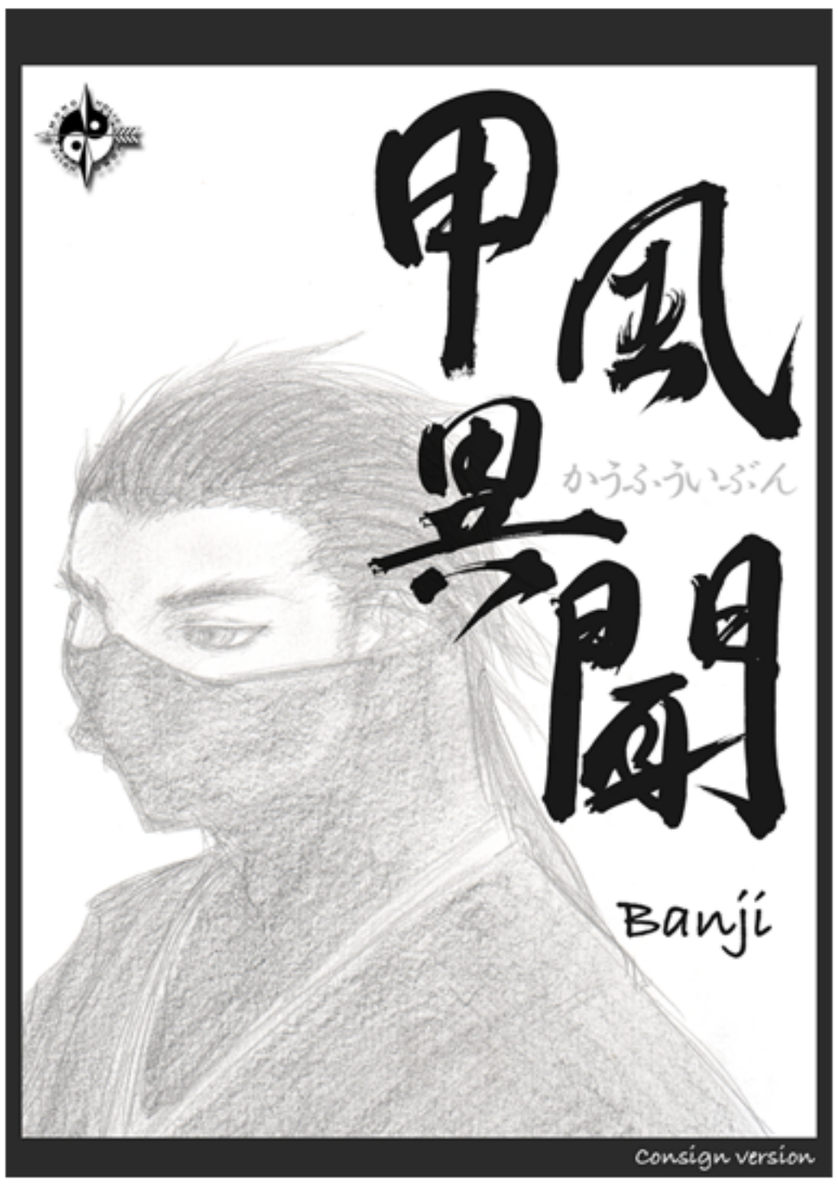
サンプル

「甲風異聞」の一章二ページ分を抜粋＊しています。
本編ではこれ以上に過激な内容があるため、
サンプルではご覧頂けません。
なお、その他付録＊＊は省かせて頂きます。

本編は．shop または委託先にて販売しております。

＊　一部内容が書き換わることがあります。

＊＊「甲風異聞 特別画集」などはサンプルに同梱されていません。
　ご覧頂くには、本編をお買い求めください。



「甲風異聞」Banji 著

定価八〇〇円＋税
二十禁小説（R-20）

．shop by Ground Top
http://groundtop.sakura.ne.jp/shop/
または委託先にて販売中。

Copyright 2008 Ground Top by Banji.

以之巻　百日（もゝか）

それは、雨の日だった。
とても寒くて、とても餓えていた。
遠くから聞こえる足音が、まるで死神が近づくようで怖かったことを、今でも覚えている。
そして、温かい手も。

突然誰かに布団を引っ張られ、重智（しのさと）は床に叩き付けられた。目を薄く開けてみれば、眩しい光が射すように体を駆け巡る。
「重、早く起きろ。ったくしょうがねぇ奴だ。布団が畳めないだろうがこの寝坊助。」
ここに来てから十五年くらいだろうか。甲風（からかぜ）流の忍者屋敷にはずいぶん慣れた気がするが、今ひとつ朝には慣れない。仲間内では「重（しげ）」と呼ばれている。いわば愛称。重智を床に叩き付けたのは今日の布団役である嵐烏（あからす）、愛称は嵐（あらし）。目的を果たす為なら少し乱暴な所がある事を忘れていた。
「いてぇ・・・。」
打ち所が悪かったのか、痛い頭の右側を抱えた。
「るせぇ、早く起きねぇからだ。みんなお前より早く起きて朝礼の準備してんぞ。」
「今日、朝礼だっけ。」
「いい加減覚えろ間抜け。」
せっせと手際よく布団を片付ける嵐烏。彼自身も既に身支度を整えている。
そんな様子を見ながら暫く頭を掻いていたが、やがてどっこらしょと立ち上がると、ふらふらした足取りで洗い場に向かう。
「ようやく起きたのか、重。」
廊下で韓起（からたち）とすれ違うと、いきなり頭をがしがしと遊ばれた。
「嵐に叩っ起されました。」
「いつものことだろ、お前は寝坊魔だからな。」
「だって、韓の時はちゃんと起こしてくれるじゃないですか。」
壁に寄りかかりながら嵐烏の文句を連ねる。
「それはそれ。お前が早く起きれるようになってくれれば、嵐も見直すだろうし、俺も助かる。」
ばっさりと切り捨てる韓起に心なしかため息が出る。嵐烏は四ヶ月先輩で年単位でいえばほぼ同期だが、韓起は八年先輩。いつも優しくしてくれる韓起は兄貴分といったところだろうか。
甲風流は他の忍流に比べて、時間にルーズな所がある。———無論、任務のときは厳守に変わりはないが。ここには頭首の性格が反映されているのだろうか。
「お前、早く顔洗って着替えろよ。」
そう言い残すと、手を翳して去っていった。
今日は何となくばたばたしている。こういう時は、大抵任務が言い渡されるものだ。打ち明けると、重智は任務に自信が無い。今まで任務をこなしてきたが、自分に重大な欠点があるからだ。それでも、任務を預けてくれる頭首は、重智が憧れている人だ。
頭首は天東（そらぬし）という。年齢や出身地などの詳しいところは重智や先輩でも知らない。色々な噂があるが、重智にとっては耳に余計である。そんな噂を聞けば相当の忍術を習得しているらしい。甲風の敵でもある伊雷（いらづま）の頭首、太名（おおみな）とは旧友であるとか。
「嫌な予感がする。」
着替えの途中、身震いが重智を震わせた。

「今日は、お前たちに試験をする。その上で優秀な者に今回の任務を与えるとする。」
綺麗に整列した忍の団に、天東の声が響き渡る。それを聴いた勢から声が漏れ始めた。
「修行とは、どのような。」
最前列にいた藍燕（あおやす）が天東に問う。
「うむ。」
その天東の声に合わせて、奥から褌姿の男が二人現れた。
「天東様、これは。」
「これが試験だ。元老（もとうい）、道猩（みちいぬ）、始めよ。」
天東が手を叩くと、道猩は元老の背後に回り込んだ。そして、脇に腕を通すと、乳首を撫で始める。
「ん・・・。」
今度は胸筋を鷲掴みにして揉み始めた。元老は褌の上から道猩の股間を揉んでいる。
「・・・あ・・はぁ、はぁ・・・・。」
二人の淫らな声が延々と響く。
「一体何をしろというのですか、天東様。このような卑猥なことを・・・。」
藍燕が少し火照った顔で叫んだ。
「卑猥ではないぞ藍。これこそが試験。二人のように服を脱いで褌一丁になり、二人一組になれ。互いは敵と思い、相手が早く達するように愛撫し合うのだ。褌を外したり、交わっても構わん、とにかく早く達させればよい。達さずにいられた者に、今回の任務を与える。」
そう伝え終わると、屋敷の奥へ消えていった。
「頭首は何を考えているのだ、そのようなことを俺たちにやらせるなどとは。」
歯を締めるように藍燕が言い放つ。
「天東の仰せの通りにせよ、もし参加せぬ者は全裸で門前に吊るすとの事だぞ。」
「聞けば、張り型も挿そうとの話も・・・。」
元老と道猩の言葉に、一同はざわめいた。ある者が服を脱ぎ出すと、次々に脱ぎ始めた。
「お前も脱げって。」
先輩の赤芻（はにくさ）が服を脱ぎながら重智に尋ねる。
「え、いや、私は・・・。」
赤芻の筋肉に少し胸が高揚している内に、自然と帯に手を掛けていた。
「お前もいい体してんなあ、十五年坊主。よし、俺と組むか。」
「でも、赤・・・。」
周りを見ると、既に皆は互いに絡み合っている。ある者は乳首を責め、ある者は肛門を責め―――その光景はまさに淫靡そのものだ。
「おら、いくぞ、我慢しとけ。」
「あぁっつつ・・・。」
「女みてぇな声出すなよ。」
赤芻の指が重智の乳首を優しく撫で上げる。必至に我慢しようとしても、乳首はどんどん起っていき感度を増幅させてしまう。
「俺を攻めなきゃ、残れねぇぞ。」
「・・んっ・・・んぁぁぅ・・・。」
乳首を触れただけで脚ががくがくして、熱い吐息が漏れる。筋肉が痙攣したようにびくびくと跳ねる手で、何とか赤芻の褌を捕らえた。陰茎の形に沿って指をなぞっていくと、赤芻の口が唸った。
「・・んぁ・・・うぁ・・。」
盛り上がってくる陰茎で、褌の前袋が膨らみ始める。それを察したのか、赤芻の手が胸筋や腹筋を探り始めた。重智が荒く呼吸をするたびに浮かび上がる腹筋の形にそって撫でていく。
赤芻が前へ身を乗り出すと、重智の乳首を舐め始めた。
「や・・うんん・・・・あぁっ・・・はあ・・・・。」